

「私の歩いた道・・・一日本語教師として・・・」

大蔵 親志

目 次

はじめに

1. 「私の歩いた道・・・一日本語教師として・・・」
2. 「道は開ける」
3. 小学時代
4. 中学時代
5. 高校時代
6. 大学時代
7. エール・フランス時代
8. 大学院時代
9. インドネシア時代
10. 香港時代
11. 大東文化大学時代ーフランス留学
おわりに

はじめに

本稿は本学定年退職にあたり、外国語学部日本語学科での最終講義の内容をまとめたものである。日本語学科同窓会の日でもあり、卒業生なども聴講に来るので、日本語教師となるまでの経緯などを話してほしいという学科の要請に答えた内容になっている。本稿では、先生方への敬称は省略している。

1. 「私の歩いた道・・・一日本語教師として・・・」

「私の歩いた道」は被修飾名詞「道」を「私の歩いた」という句が修飾している連体(修飾)節である。この連体節は「私が歩いた道」とも言えるもので、三上章が「ガノ可変」と呼んだものである。三上章は東洋大学へ提出した学位論文で博士号を取ったが、もともとは数学者で日本語学者としては、国内よりも海外での評価が高かった。この論文の査読が佐久間鼎であったことも注目に値する。佐久間もゲシュタルト心理学の研究者で、本来の日本語学者ではなかった。佐久間の推挙がなかったなら、三上の学位取得も難しかったと思われる。

この連体節「私の歩いた道」が「その道を歩いた」と被修飾名詞が格関係でもって内部に入れることができるものを「内の関係」、それができず被修飾名詞の内容を示すだけのものを「外の関係」とよぶ論文を発表したのが寺村秀夫である。これは従来の連体

修飾節に対する考え方に新しい視点を向けた画期的な論文であった。同時期に奥津敬一郎もだいたい同じ趣旨の論文を発表しているが、両者は互いの論文の存在は知らず、独自の考察の結果であった。

寺村秀夫は三上章と親しく、三上亡き後もMBK（三上文法研究会）の主要メンバーとして活躍してきた。寺村ももともとは法学部の出身で、アメリカ構造主義言語学との出会いが言語研究への道へと進ませたとされている。

私はこの寺村秀夫にインドネシア滞在中に出会っている。私の赴任していた大学に日本語教育視察団一行の一人として加わっていたのである。これが機縁で、本学にも講演に来ていただいたことがある。その時は、講堂に溢れるばかりの聴講の人々が集まった。人と人の出会いの不思議さを感じるのである。

私は日本語学科創設以来、自分のゼミでは一貫して寺村秀夫の論文集をとりあげて、ゼミの学生と研究を続けてきた。

2. 「道は開ける」

私は例年、卒業生に送る詞として「道は開ける」という詞を送っている。

これをフランス語に訳すと「*La route s'ouvre.*」となる。この再帰代名詞「s」の機能が大切である。「道は自ずから開ける」の「自ずから」に当たる。

かつて、色々な苦難に直面したとき、悲観的にならずに、常に楽観的に状況を判断し「道は開ける」と信じて進んできたものである。その経緯はこれからお話しすることになるが、私の紆余曲折の人生の道のりをお話することは、これから自分の道を歩もうとする若い人々になんらかの力を与えるかもしれない。道は自ずから開けるものだが、まわりの人の助けによることを忘れてはならない。出会った人々との縁を感じとり、それに感謝することが大切である。そのときに、道は自ずから開けるのである。

3. 小学時代

私が小学校に入学したのは1941年で、ちょうど太平洋戦争が勃発した年である。小学校時代の最初の4年間は、軍国主義教育の真っ只中で過ごしたことになる。朝礼で軍国主義を鼓舞する校長の姿や、二時限目が終わると全校生徒が校庭に集合して、パンツ姿で行進した光景が今でも目に浮かぶ。それでも、京都府北部の山村では空襲の心配もなく、子供らしい日々の遊びといたずらに耽りながら、その日その日を過ごしていた。

小学時代の思い出として忘れられないのは、生涯の友I君との出会いである。I君は大阪の生まれだったが、戦争による空襲を逃れて田舎に疎開してきた。この静かな秀才との出会いによって、腕白坊主であった私も少しは勉強をするようになった。数年前、大阪で病院を経営し、院長になっているI君に数十年ぶりに再会した。

小学時代は校長の息子という秀才のY君がクラスを牛耳っていた。彼の「整列」という気合のこもった号令の響きが今でも耳に残っているぐらいである。しかし、戦後の6

年生にもなると、ガキ大将のK君もかなり権力を誇示し始めた。ある日、ついにこの二人は殴り合いを始めたが、その結末はあっけないものだった。Y君の顔面蒼白になって震えていた姿を今でも鮮やかに覚えている。権力闘争はガキ大将の勝利に終わった。しかし、これにはまだ結末があった。何十年ぶりに出席した同窓会で、会を牛耳っているのはY君で、例のガキ大将のK君は農業で日焼けした顔で笑っている好々爺になっていた。

小学時代最後の学芸会で、野口英世を演じたことも忘れられない。子供の時、手にやけどをして、それを治してもらって医学の道を志した少年時代の英世を演じた。そういう関係で野口英世には関心があり、かれの生涯の業績を調べたりしたことがある。

同窓会で、同級生がテレビにも出た話として話題になったのは、盲聾の息子のために手による発話の方法を生み出し、その子供を東大の助教授になるまでに育てた、今は亡きY女のことや、退職後は盲導犬の養育に余生を捧げているN君が育てた盲導犬クイールのことである。

4. 中学時代

私は新制中学の第一期生になり、戦後の混乱期に中学に入った。校舎はまだ整備されてなく、各学年ごとに、校舎の移転を余儀なくされた。整備されない教室での学習ではあったが、戦争も終わり民主主義の教育が導入されて、なんとなく未来に希望が感じられた時代だった。

英語教育の普及があって、特に英語への興味が湧いてきたことを覚えている。英語の担当の先生は英米人にまだ一度も会ったことのない人物で、その発音は今から考えるといい加減であったように思える。しかし、熱心な先生で、生徒に教科書を全部暗誦させるという教育であった。

クラス担任のY先生はやさしく美しい先生で、その面影はいまでも懐かしく思い出される。そのY先生が結婚されてK先生になられた時は、ショックだったことを覚えている。

卒業に際して、先生は次のような送別の歌を私に送ってくださった。

「朝日さす 大海原の波越えて 君がゆくでの 幸を祈らん」

私は、色紙に達筆で書かれた先生の歌を今でも大切に保管している。

5. 高校時代

高校時代は悩みの多い時代だった。受験勉強もあったが、生きることに対する意味を求めて、文学作品を読み漁った。特に太宰治に惹かれ、彼の作品の多くを読んだ。山崎富栄という女性と東京三鷹の玉川上水で入水自殺をしたというニュースには大きなショックを受けた。

私の蔵の中での受験勉強は、快調とは言えなかったが、時々甥のSを呼んでコンサートをやったりしていた。Sは当時、別の高校に通っていたが、高校の合唱団の指揮など

もやっていた。彼は自分の高校の尊敬していた先生を囲んで、「あけぼの会」というグループを結成していた。私もそれに参加させてもらって、交換ノートに青春時代の悩みを書き送ったものだ。Sはそのグループの一女性にひそかに恋心を抱いていたようだったが、結局は実らなかった。私は大学院時代に新大久保で小さな学習塾を開いたが、その塾の名前を「あけぼの塾」と名付けた。

当時、イタリア映画が盛んな時代で、「苦い米」「自転車泥棒」「鉄道員」などネオ・リアリズム映画が上映されていた。「苦い米」のシルバーナ・マンガノの若々しい肉体美には圧倒されたものだ。それで、イタリア語の勉強を始めたりしたが、難しい言語だと感じただけで長続きはしなかった。

6. 大学時代

東京に住む義兄のすすめで、上智大学に入ることにした。外国人が多く少人数の徹底した語学教育をやるということだった。上智大学は、当時は男子のみの大学で、外国語学部はまだなくて、文学部外国語学科フランス語専攻となっていた。そこでフランス語を学ぶことにした。

私は2期生で、20数名のクラスだった。1期生は7名で、後に作家として著名になった井上ひさしがいたが、直接話す機会もなく終わってしまった。フランス語を教える神父から将来作家になるだろう人材がいるという話は聞いたことがあるが、後になって神父の人を見る眼力のようなものを感じたことがある。

上智大学はカトリックのイエズス会が経営する大学で、教授陣にも多数の神父が加わっていた。イエズス会はイグナチウス・ロヨラによって1534年(1540公認)にパリ郊外で創立された。同じくバスク出身のザビエルもそれに参加している。そのサヴィエルがイエズス会宣教師として鹿児島に上陸したのは、1549年のことである。

キリスト教の布教が目的ではあったが、イエズス会宣教師たちによる日本語研究は注目に値する。宣教師の中でも、ジョアン・ロドリゲスの日本語研究は高く評価されている。

ロドリゲスは1577年イエズス会の通事伴天連として来日した。当時、すでに他のキリシタン宣教師によるローマ字本の刊行や日葡辞書の作成が行われていた。ロドリゲスは、長い血の滲み出るような研鑽の後、日本語の文法書である『日本大文典』(3巻)を1608年長崎で刊行している。ロドリゲスは、1610年日本を離れマカオに赴任し、そこで『日本小文典』を刊行している。1634年、享年74歳でマカオで死去している。私は香港在任中、マカオにあったロドリゲスが生涯の最後を送ったと思われる修道院を訪ね、彼の存在の痕跡を調べたことがある。

上智大学では、外国語学部ができ、我々はそのフランス語学科に所属することになった。初代の学科長はM神父であった。この神父は北フランスの出身で、同郷のドゴール大統領とは親しい間柄だと言われていた。

私はこの神父に可愛がられ、フランス語で書いた日記を添削してもらうため大学構内にある神父館を毎週訪ねていた。神父は私をカトリックに導きたかったらしく、公教要

理研究グループに紹介してくれたが、私は神父の期待に反して、洗礼を受けることなく終わってしまった。しかし、M神父は後に就職に悩んでいた私を見て、エール・フランスに紹介してくれた。

後に、私はロニー研究のため北フランスのリール大学に留学することになるが、その大学で親しくなったフランス人夫妻に自宅に招待されて彼らの結婚式の時の写真を見せられた。司祭として、この夫婦の間に立っていたのはM神父だった。この方は私の先生でしたといった時の彼らの驚きはいかばかりだったろうか。その時、私は何か運命の絆、神の導きといったものを強く感じたものである。

7. エール・フランス時代

就職の時期を迎えて、大阪の貿易商社に働く先輩からの話があって迷っていた私はM神父に相談に行った。するとエール・フランスで働くつもりはあるかと聞かれた。寝耳に水の話で、航空会社で働くことなど考えもしていなかった。神父に勧められるままに、2月末にエール・フランスの総務部長との面接試験と筆記試験を受けた。この総務部長はフランスのポリテクニク出身のエリートでまだ30歳過ぎの若い人物だった。

私は採用されることになり、卒業式も終わらない、3月1日から働くことになったのである。事態は、私の予想を越えてどんどん進展していった。

当時エール・フランスは有楽町の日活国際会館と三井ビル内にオフィスを構えていた。私は総務部人事課に配属されて、社会人としての新しい生活のスタートを切ったのである。エール・フランスの上層部はだいたいフランス人で占められており、日本人はせいぜい課長どまりというところだった。社員の給与計算などを主な仕事とする人事課では日本人社員の給与のみ扱っていた。

フランス人の給与などは秘書課というところが扱っていて、われわれの知るところではなかった。皇太子妃雅子さんのお母さんも江頭という名前で、そこに勤務されていたと思う。当時は、評論家江藤淳と関係のある人ということも全然知らなかったが、総務部長の部屋に来られる姿を時々見かけたことはある。

エール・フランスの仕事は何とかこなしていたが、人の給料の計算などにはあまり興味が持てなかった。会社の昼休みは日本の会社と違って、12時から2時までの2時間だった。同僚は昼休みには囲碁に興じている人が多かったが、私は名曲喫茶「タクト」で音楽を聴きながら将来の方向を模索していた。

私がエール・フランスで働いていた当時、空港の荷物担当従業員を巻き込んだピストル密輸事件が発生し、数名の逮捕者を出したりして、社内が動揺していた。また、たて続けにエール・フランスの飛行機が墜落して、社会的にも問題になっていた。有名なバイオリニストのジャック・ティボーがその事故で亡くなったりした。そのころ、赤坂のエール・フランスビルへ全部署が移転することになったが、それを契機に私は退職の決意を固めた。

故郷に帰って将来を模索しながら過ごしていると、上智大の同級生のN氏から電報が入って、父の経営する高校で働くようにということだった。N氏は同級生といっても、

若いころ結核を患って、大学に入ったのは30歳近かった。親父さんが大学や数校の高校を経営する人物で、彼は大学卒業後、その一つの高校の校長になっていた。そこで専任として勤務することになったが、大学院入学後は、非常勤として働かせてもらった。

8. 大学院時代

幸い、早稲田大学の大学院に入学できたので、そこで18世紀啓蒙思想の研究をしたいと思い、ルソー研究者平岡昇ゼミに入れてもらった。そしてルソーとは友人でもあったデイドロを研究することにした。

当時、私は新大久保で「あけぼの塾」という小さな塾を経営し、先の高校の非常勤の他にフランス語の家庭教師などをやりながら、それなりの収入を得ていた。不安定ではあったが、なんとか生活しながら大学院に通っていた。

ある日故郷の母から写真が送られて来た。会わせたい人がいるから至急帰って来いという手紙である。私は32歳になっていたから、年齢的には結婚してもよい年頃ではあったが、まだ学生の身分でもあり生活も不安定であったので結婚は無理だと考えていた。私は母に生活の現状を説明するつもりでとりあえず帰郷することにした。

しかし、私の家では既にお見合いの席が設けられており、私はお見合いをすることになり、写真の女性と初めて会ったのである。彼女はまだ23歳で、素朴で純情そうな女性だった。大学院などで勉強する人と一緒にやっていきたいという言葉に感動して、私はこれからの生活のことなどすっかり忘れて結婚することにしたのである。6月に会って9月に結婚式を挙げた。私の家での挙式で仏前結婚であった。新婚旅行は東海道線の途中でちょっと下車して、湯谷温泉に立ち寄っただけの質素なものであった。

結婚後、生活は楽ではなかったが、先のN氏から電話があって、お姉さんがドイツに留学のため家が空くから留守番をしないかとのことだった。その後、3年間、その大きな邸宅の管理と留守番をやることになった。二人の娘たちも、この家で生まれた。生活の上では家賃が要らなかったので、なんとか妻子を養っていけたのである。当時は無我夢中で生きていたが、実際はまわりの人々の助けによって、生かされてきたことを思い知らされるのである。

9. インドネシア時代

上智大学の同級生で、現在教授になっているIからカンボジアのプノンペン大学へ、日本語教師として行かないかという話が持ち込まれた。彼も専門のアンコールワットの研究でカンボジアに行くことになっていた。大学院の修士課程を終えて、行き先に悩んでいた私はその話に乗って、とりあえず妻子を残してカンボジアに行くことに決めた。しかし、当時のカンボジアは政情が不安定で、共産主義勢力のクメール・ルージュ軍がプノンペン包囲網を狭めつつあった。私のプノンペン大への派遣は、出発の3日前にストップがかかった。

当時、日本語教師の派遣業務などは海外協力事業団(OTCA)が行っていた。ここで

は、電信電話・港湾・経済協力などで派遣される人々も含まれていた。現在は、文化交流を主とする国際交流基金 (Japan Foundation) と経済協力を主とする国際協力事業団 (JICA) に分かれている。

派遣の突然の中止で、1歳と3歳の子供を抱えて、これからの生活をどうしようかと苦慮していた私に同情されたのか、海外協力事業団の担当課長の方が、インドネシアへ行ってみますかと提案してくれた。私はその方の親切に感謝しながら、思いもしなかったインドネシア行きを決意したのである。

インドネシアに到着して、空港での異様な暑さと臭いとに圧倒されながら、ホテルでの歓迎会に臨んだ。大使館文化担当官や大学日本語関係者と今後の打ち合わせがあり、特に家探しの問題が大変なことを知らされた。事実、家を見つけて妻子を呼ぶまでに数ヶ月の時間を費やしてしまった。幸い、クバヨラン・バルーという住宅街に一軒の家を見つけることができた。以後快適に生活でき、学生との交流の場としても活用できてよかったと思っている。

私の派遣先は国立の外国語大学 (Academi Bahasa Asing P&K(文部省))日本語学科で、その他、英語・ドイツ語・フランス語・ロシア語・オランダ語・アラビヤ語の7学科からなる大学であった。当時から、6年制通訳養成所への発展計画が取り沙汰されていた。しかし、その計画は頓挫して、先生方は後にインドネシア大学に吸収されることになる。

この外国語大学は3年制で、日本語学科には各学年に30名程度の学生がいた。学生は中国系とインドネシア系が半々であった。授業は8時～12時までだったので、午後は時間があつたが、みなさんが昼寝をする時間なので、他人の家を訪問するのは失礼とされていた。

私の赴任を聞きつけると、数名のABA学生がさっそくホテルにやってきて、市内を案内したりしてくれた。その学生の一人が、ちょっとタバコを買ってきますと言って、煙草を一本だけ買ってきて、うまそうに吸っていた光景を今でも鮮やかに覚えている。

インドネシアは、赤道直下の17000以上の島々からなる島嶼国家である。気温は年間を通じて、平均27℃前後で、屋内は思ったほど暑くはない。

インドネシア語は、オーストロネシア語族 (マラヨ・ポリネシア語族) に属し、マラッカ海峡の商業言語として古くから使われていたムラユ語 (Bahasa Melayu) が発展したもので、インドネシア語 (インドネシア)、マレーシア語 (マレーシア)、マレー語 (ブルネイ、シンガポール) へと発展してきた。

言語学者の中には、泉井久之助や村山七郎など日本語との親族関係を説く学者もいて、mata (目)、tangan (手)、hidung (鼻) など身体用語が研究の対象としてとりあげられている。

私がインドネシアに派遣されたのは1972年であるが、当時の政治状況はまだ、1965年の軍部と共産党との権力闘争の影響が残存していた。証明書30Sの所持が義務付けられていた。「私は1965年9月30日の事件には関係していません」という証明書である。スハルト体制はやや安定してきていたが、政治的にも経済的にも様々な問題を抱えていた。

帰国も近づいたころ、田中首相のインドネシア訪問を契機として、反日・反政府暴動が起こった。合弁会社トヨタ・アストラの焼き討ち、日商岩井の宿舎襲撃などがあって、一週間ばかり家から出られなかった。ちょうど家に遊びに来ていた中国系学生が帰宅できなくなったり、インドネシア人の先生がオートバイで暴動の状況を知らせてくれたりした。

帰国前の数ヶ月は、日本語学科の学生を日本企業に就職させるために、各企業を回った。幸い、多くの日本企業が日本語を話せる人材を求めているので、全員を就職させて帰国したのである。今でも、そのまま働いている人もいるし、かれらとの交流は今でも続いている。

10. 香港時代

インドネシアから帰国して、しばらく国際交流基金で海外日本語教師の受け入れ業務をしていたが、その後しばらくして、香港への派遣が決まった。派遣先は香港日本国領事館文化部で、その日本語講座の主任講師ということだった。交流基金からの派遣は私が第3代だった。

教授陣は、国際交流基金派遣の者が担当することになっていた主任講師の他に、中国人講師6、日本人講師2、事務補佐1である。中国人講師は年配の方が多く、日本語は日本人と変わらないほど達者な人達だった。日本人講師は香港駐在の人の奥さんになってもらっていた。

在任当時の日本語講座の構成は、1年350名、2年200名、3年120名、研究班40名、そのほとんどが広東系中国人であった。

クラス編成は、初級クラス(6クラス)、中級クラス(4クラス)、上級クラス(2クラス)、研究班(1クラス)となっていた。授業は週2回授業で、一般社会人を対象とした日本語教育のため、夜間部を中心としていたので、午前、午後のクラスは少数だった。

この日本国総領事館の日本語講座は、香港では想像以上に高い評価を得ており、志願者が殺到し、その選抜方法に苦慮しなければならなかった。志願者は2000人を越えるのが通例だったため、公開抽選という方法をとっていた。また、裁判所の職員、警察官といった公務員、日本商社に勤務する者などの優先入学などの処置もとっていた。印象に残った学生としては、前香港行政長官董建華氏夫人、香港映画の女優、ミス香港、香港警察の刑事などである。

香港は、当時イギリスの植民地で、公用語は英語、広東語であった。多数の日本企業が進出しており、日本人学校も満杯状態であった。

1997年に中国に返還されたが、海外に脱出した人々も多いが、中国の経済発展の様子を見て、また帰国している人々もいるようである。

香港の人々は一部の大金持を除いて、マンションに住む人がほとんどである。私たち家族も、21階建ての高層マンションの21階に住むことになった。当時、台風による地盤落下事件が起きて、日本の銀行関係者の家族に被害がでたりした。マンションは日

本では想像もつかないほど警戒が厳重で、一階の入り口には守衛がいて、21階の入り口は二重の鉄格子になっていた。それだけ香港の治安は問題だったといえる。

総領事館のような在外公館で日本語を教えるには、いろいろと難しい問題があった。文化アタシエとして公用パスポートを出してもらえる利点はあるが、日本語教育以外の領事館のさまざまな行事の雑用に使われることもあるし、日本語教育という点でも、雑多な年齢層の人々に対処しなければならなかった。

学生のほとんどが広東語である。広東語は中国語の一方言で、旧字(繁体字)を使用している。北京語は四声だが広東語は九声といわれ、豊かな母音を持つ声調言語であるので、日本語のような平板なピッチアクセントにどうしてもなじめない者もいた。孤立語としての中国語の話者にとって、膠着語としての日本語の助詞などの適切な使用がなかなか難しいところがあった。

香港に在任中、東南アジアの日本語教育視察の途中、鈴木忍先生が香港に立ち寄られた。本学の初代別科長になられた鈴木先生との縁故から、私は本学に勤務することになったのである。鈴木先生が病で倒れられたため、先生と共に本学での留学生教育ができなかったことが今でも残念に思えてならない。

11. 大東文化大学時代ーフランス留学

大東文化大学に赴任してから10年経った1990年研究留学の許可をもらったので、北フランスのルール第三大学へ留学することになった。

フランスでは初めての日本研究者で、1868年にパリ東洋語学校日本語学科の初代教授になったレオン・ド・ロニーの研究のためである。

ロニーの生まれたルールという町は、かつて繁栄したフランドル王国の首都であったところで、フランドル美術の開花した都市としても有名である。

加賀乙彦の小説「フランドルの冬」には、この地方の精神病院の様子が詳細に描かれているが、この小説のモデルとなった精神病院は実在している。作家が自分の小説のモデルとなった場所を再訪するという企画のテレビ番組のなかで、加賀乙彦がこの病院を再訪して、かつての同僚らと対面するシーンを見たことがある。私も友人のフランス人の案内でこの精神病院を訪ねてみた。

私はロニーの生誕の地である、ルールのルースという町に住むロニー研究家デュボア博士のお宅に下宿させてもらうことになった。彼はこの地域では知られた医者で、故郷が生んだ学者ロニーについて研究しており、ロニーに関する膨大な資料を収集していた。また、鉄道マニアで、広い庭園の回りには小型の機関車が回っており、実際人間も乗れるのである。その3階建邸宅の3階部分は子供も入れない部屋があって、世界中の模型の汽車が動き回っていた。彼が主催する鉄道マニアの集いに連れて行かれて、みんなから日本の鉄道について色々質問されて、とても困惑したことがある。

フランスではじめての日本研究者となったロニーは、北フランスのルースにある中央拘置所の官舎で生まれている。ロニーの父親がこの拘置所に勤務していたからである。ロニー生誕の当時は会計書記だったが、後には所長になっている。この拘置所は、かつ

て女子修道院であったところで、拘置所になってから現在も存在している。私はデュボア博士の案内でこの拘置所の内部を視察させてもらった。

ロニーは1861年にフランス、イギリス、オランダ、プロシア、ロシアなどのヨーロッパ諸国に派遣された使節団の通訳をした。その仕事を通じて、使節団の若い人々と交流している。特に福沢諭吉とは親しかった。福沢が帰国後の1866年に出版した「西洋事情」は15万部のベストセラーとなり25万部の海賊版が出たと言われるが、ロニーから数多くの情報を得たと思われる。ロニーは2年後の1868年の「アジア新聞」に「西洋事情」の書評を書いている。リール図書館には福沢諭吉から贈呈されたと思われる「西洋事情」一冊が存在している。

ロニーは使節団の中で、福沢のほかには福地源一郎（桜痴）とも親しくなっている。当時は天下の双幅とも呼ばれたぐらいだが、現在では福地の名を知る人もわずかになっている。福沢が大阪の適塾で蘭学を学び、後に森山（多吉郎）の英学塾に至ったのに反して、福地は長崎で蘭学を学び、その後森山塾に至り、二人が出会うことになったのである。福地の場合、彼が記録して提出したヨーロッパ紀行の報告文を役人がなくしたり、彼自身の原稿も火事で焼失するという不運が重なってしまった。福地は1865年再度渡欧して、国際法、フランス語をロニーに学び、帰国後、1868年に「江湖新聞」を発刊したり戯曲を書いたりしたが、福沢ほど後世に名を残すまでには至らなかった。

遣欧使節一行をオランダで迎えたのは、ライデン大学教授ホフマンである。シーボルト事件の後、日本を離れたシーボルトに偶然出会い、オペラ歌手の職を棄てて日本研究の道に入ったという数奇な経歴の人物だが、その時は57歳だった。彼は、7年後の1868年、後世に残る日本語研究の書「日本文典」を刊行している。

私はフランス留学中、フリーメイソンとしてのロニーについても研究を進めた。フリーメイソンは秘密結社として有名であるが、モーツァルト、ゲーテ、モンテスキュー、ユーゴーといった人々、アメリカ独立にかかわったワシントンを始めとする歴代大統領、現代ではマッカーサー元帥、鳩山一郎など時代を画した人々が入会している。私が大学院で専攻したデイドロもそうであったと言われている。ロニーの父親も熱心なフリーメイソンであり、ロニーもその影響を受けたようだ。ロニー研究によって、早稲田の大学院で専攻したデイドロとが結び付いた時は、密かな興奮を覚えたものだ。日本人での最初のフリーメイソンは、ライデン大学に留学した西周、津田真道であるが、帰国後はそれから離れている。

フランス留学中は、日常生活の中でも、いろいろな苦くもあり、滑稽でもある様々なエピソードがあった。その詳細は、長くなるのでここでは省略させていただく。

おわりに

本学に赴任以来、私は別科をはじめとする本学の留学生のための日本語教育にかかわってきた。1993年の日本語学科創設にも微力を尽くしてきたが、26年の勤務を終えて定年を迎えることになった。26年の勤務の最後の2年間を別科長として終えることになったのも不思議な縁といえよう。

引退後は、3人の孫の相手のかたわら、先に述べたレオン・ド・ロニーについての研究をさらに続けたいと思っている。